

母親の育児不安と育児不安が養育行動に及ぼす影響

北 村 愛 子*

Mother's Child-Care Anxiety and Influence
of Child-Care Anxiety on Child-Care Conduct

Aiko Kitamura

(1998年10月30日受付)

ABSTRACT

The aims of this study are as follows ; 1) To understand the character of mothers' child-care anxiety for their children 2) To understand the factor which causes the mothers' anxiety about the child-care of their children 3) To research into the influence of child-care anxiety on child-care conduct, viewing from the action related to their children's excretion. The subject of the survey in this study are mothers whose children are younger than 4 years old and go to nursery schools, and are in process of excretory independence.

The result of the survey was like this ; Mothers belonging to 'a group having anxiety' tended to show strong response of negative consciousness, as compared with mothers belonging to 'a group not having anxiety'. In the former group, when they care for children's excretion, the words to their children and the attention to the observation of excretions tended to be decreased. In addition, mothers belonging to 'a group having anxiety' thought that children's feces were dirty and that it was troublesome to change diaper whenever they excrete and to take children to the washrooms.

Key words : child-care anxiety, child-care conduct, child-rearing

*本学 短期大学部 小児看護学

I. はじめに

子どもは生まれて最初に所属する集団は家族である。そこで母子一体の時期から始まって、漸次的に、父親や同胞などの他の家族との関係を持ち、他者からの働き掛けを受け他者に働き返すという社会的相互作用の過程を通してパーソナリティを形成していく。特に母子関係は子どものパーソナリティに大きく影響を与える¹⁾ことになり、社会化の基底になる。従って、良好な母子関係で育児を行うことが重要である。

しかし、近年、子育てが「辛い」、「子どもがかわいく思えない」と育児困難を訴える母親が多くなり、育児ストレスや育児不安など育児に携わる親の悩みや葛藤を扱った研究が増加している²⁾。また、親による子どもの虐待も年々増加している現状も報告されている^{3,4)}。子育ての機能は今も昔も変わらないが、昨今の子育てには大変困難な状況がでてきている。このような育児困難が出てきた背景には、少子化や核家族化などの家族形態の変化、地域社会の連帯の希薄化、就業女性の増加、女性の自己実現の道の多様化、育児情報の氾濫などが考えられよう。

育児不安に関する研究は数多く報告されているが、育児不安が母親の養育行動にどう影響するかについては明かでない。そこで、育児不安が養育行動にどのように影響しているかについて、子どもの排泄に関わる世話の側面から検討を行なった。

II. 育児不安に関する研究の概観

母親たちが育児に悩みや葛藤を抱き、子どもが可愛く思えず、育児態度に適切さを欠くという現象は、1970年代後半から1980年代前半にかけてみられるようになった⁵⁾。このような現象が起きた背景として大日向^{6)~7)}は昭和初期から現代の3世代の母性意識を比較し、現代の母親は育児と自己の生きがいとの間に葛藤が大きい

こと、育児に専念することで社会からの疎外感や焦燥感を強めており、それが育児疲労や育児ノイローゼにつながる傾向があること、また日本社会に母性信仰が根強く、育児は母親の適性とする社会通念のもとで育児の責任の大半が母親に託され、母親たちが心理的に追いつめられていること、母性を強調することによって逆に母子の成長発達に必要な条件を模索しようとする視点に欠けてきたことをあげている。そして、育児の男女共有、夫婦関係の確立、育児への社会的支援の必要性、女性の就労を始めとしたライフスタイルの変化に対応した育児のあり方を検討する必要性を指摘した。

さらに、大日向⁸⁾は幼児をもつ母親を対象として、子どもの発達に関する不安の程度と母親自身の日常不安、父親の育児協力との関連性を検討し、特に父親の育児協力の有無が母親の育児不安に影響していることを明らかにした。父親の協力としては、家事や日常的な世話よりも精神的な協力や夫婦間の絆の有無が重要という結果が得られている。

牧野⁹⁾は乳幼児を持つ母親の生活と育児不安との関係を調査し、母親の不安の程度に関連する大きな要因は夫婦関係と母親の社会的な人間関係の在り方であり、夫も子育てを一緒にしてくれている・子育てに責任をもってくれていると感じている母親や近隣・地域活動などより広い人間関係を持っている母親は育児不安を低くしていたことが判明した。この牧野の研究の14年後の中津ら¹⁰⁾の研究でも同傾向がみられている。

現代社会の少子化、核家族、高学歴社会、情報化社会、家族・地域の連帯感希薄という状況は、母親に子育ての困難さを感じさせ育児不安を引き起こしているが、子育てに夫の支えがあったり、母親が地域の中に友人など話せる人がいる場合は、育児に困難を感じても解決できるものと考ええる。

川井ら¹¹⁾は育児不安の本態は「育児困難感」という心的状態であり、「子どもをうまく育て

ていると思えない」「子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある」「子どものことが煩わしくイライラする」「叱りすぎるなど、子どもを虐待しているのではないかと思うことがある」の4項目が中核的育児困難感の因子になることを明らかにした。また、恒次ら¹²⁾は育児不安項目と児の年齢について検討し、1歳から2歳以降の母親に育児に対する困難さが高まり、母親自身の状態が不安定になることを示唆している。育児のどのような状況の時に悩むかについて、子どもの年齢では^{13,14)}乳幼児期の子どもが多く、特に0～2歳までの子どもに多くみられている。出生順位では¹⁵⁾、第1子の母親に悩みが多い傾向がみられている。子どものどのような状況の時に育児に困難を感じるかは¹¹⁾、「泣き虫」「しつこい」「落ち着きがない」といった子どもの性格や、「熱」「風邪」「体重が増えない」といった身体心配である。「言葉が遅い」「泣く」「排泄」といった心配は乳幼児期全般を通してみられ、3歳以上では「疳が強い」「こだわりが目立つ」の性格や、「タオルを離さない」「爪かみ」といった習癖、3歳未満では「眠りが浅い」「一人で寝ない」が母親の育児困難感を強くしていた。この他、育児不安に関する研究は数多くみられるがいずれも育児不安の実態や要因を中心とした研究であり、育児不安の強さが育児をする母親の養育行動にどのように影響するかについて検討した研究は見当たらない。

Ⅲ. 研究目的

- 1) 母親の育児不安の特徴及び育児不安を起こす要因について把握する。
- 2) 育児不安は養育行動にどのように影響しているかについて、子どもの排泄に関わる育児行動の側面から検討する。

Ⅳ. 用語の定義

育児不安とは、育児行為の中で一時あるいは瞬間的に生ずる疑問や心配ではなく、持続し、蓄積された不安状態をいう。すなわち、子育てに関連する漠然とした不安が蓄積され持続した状態であり、疲労感や気力の低下、イライラの感情、育児意欲の低下などを含めた心理状態をさす^{9,16)}。

養育行動とは、しつけを含む子どもの日常生活の世話行動であるが、ここでは日常生活行動の一つである排泄の世話行動とする。

Ⅴ. 研究方法

1. 調査対象：保育園に通園している排泄の自立過程にある4歳までの乳幼児を持つ母親であり、有効回収400名を対象とした。
2. 調査期間：1997年8月～9月
3. 調査方法
 - 1) 調査方法：留置調査であり、保母を通して母親に依頼し、家庭で記載後保育園で回収してもらった。なお、調査用紙は無記名とし、調査用紙には、調査の結果はすべて統計的処理をするため個人に迷惑をかけることはないことを付記した。
 - 2) 育児不安の調査項目：育児不安の測定尺度として有効であることが確かめられている牧野⁹⁾の調査項目を採用した。この調査項目はⅠ、一般的疲労感 Ⅱ、一般的気力の低下 Ⅲイライラの状態 Ⅳ、育児不安徴候 Ⅴ、育児意欲の低下の5つの特性をとりあげ、表1のように14項目から構成されている。育児におけるネガティブな感情や意識の有無を問うものを8項目(N)、逆に育児に対する自信や満足感、安心感の有無を問うポジティブなもの6項目(P)である。育児不安の要因を検討する項目は母親の背景（年齢、家族構成、就業状況）、子ども

表1 育児不安項目

(1) 毎日くたくたに疲れる。	(N)	一般的疲労感
(2) 朝めざめがさわやかである。	(P)	
(3) 考えごとがおっくでいやになる。	(N)	一般的気力の低下
(4) 毎日はりつめた緊張感がある。	(P)	
(5) 生活の中にゆとりを感じる。	(N)	イライラの状態
(6) 子どもがわずらわしくて、イライラしてしまう。	(P)	
(7) 自分は子どもをうまく育てていると思う。	(P)	育児不安の徴候
(8) 子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある。	(N)	
(9) 子どもは結構一人で育っていくものだと思う。	(P)	
(10) 子どもをおいて外出するのは、心配で仕方がない。	(N)	育児意欲の低下
(11) 自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう。	(N)	
(12) 育児によって自分が成長していると感じられる。	(P)	
(13) 毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う。	(N)	
(14) 子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う。	(N)	

の背景（年齢、性別、兄弟の数、第何子）

母親からみた父親の子育て状況である。

- 3) 養育行動の調査項目：おむつ交換時、排泄トレーニング時の子どもへの接し方、排泄失敗時の子どもへの接し方、排泄物の観察、子どもの排泄や排泄物に対する感情、子どもの排泄に関する気掛かりについての5項目である。
- 4) 育児不安の評定尺度：14の調査項目について「よくある」「時々ある」「ほとんどない」「全くない」の4段階での評定を求め、不安度の程度は点数化をした。ネガティブな意識の8項目については、「よくある」を4点、「時々ある」を3点、「ほとんどない」を2点、「全くない」を1点とし、ポジティブな意識の6項目については、「よくある」を1点、「時々ある」を2点、「ほとんどない」を3点、「全くない」を4点とし、対象者個人の育児不安度を算出した。得点が高いほど不安度が高いことを示し、少ないほど不安度が低く育児への自信や満足感を示すことになる。（最高は14項目×4点=56点、最低は14項目×1点=14点）。
- 5) 育児不安度の高い群を「不安あり群」低い群を「不安なし群」として、各調査項目とクロス集計し、カイ二乗検定を行なった。

VI. 結果

1. 対象者の属性（表2～6）

母親の年齢（表2）は、30～34歳が最も多く、ついで25～29歳、35～39歳の順であり、25～39歳までの母親が大半（91.2%）を占めている。就労形態（表3）は、フルタイムの仕事をもつ母親が35.8%、パートタイムで働いている母親が30.5%であった。家族形態（表4）は、

表2 調査対象者（母親）の年齢

年 齢	人 数	割 合
20歳未満	2	0.5
21～24歳	14	3.5
25～29歳	102	25.5
30～34歳	175	43.8
35～39歳	90	22.5
40歳以上	17	4.2
計	400	100.0

表3 調査対象者（母親）の就労形態

年 齢	人 数	割 合
職業をもたない	24	6.0
フルタイム	143	35.8
パートタイム	122	30.5
内 職	35	8.8
家 業	65	16.2
そ の 他	11	2.7
計	400	100.0

表 4 家族構成

家族形態	人数 (割合)
核 家 族	283 (70.8)
複合家族	116 (29.0)
無 回 答	1 (0.2)
計	400(100.0)

表 5 子どもの年齢

子どもの年齢		人数 (割合)	男児	女児
乳児	1 歳未満	11 (2.7)	6 (3.0)	5 (2.5)
	1 歳～1 歳 6 か月まで	26 (6.5)	15 (7.5)	11 (5.5)
1 歳児	1 歳 7 か月～2 歳未満	43 (10.8)	16 (8.0)	27 (13.5)
	2 歳～2 歳 6 か月まで	68 (17.0)	44 (22.0)	24 (12.0)
2 歳児	2 歳 7 か月～3 歳未満	57 (14.2)	30 (15.0)	27 (13.5)
	3 歳～3 歳 6 か月まで	86 (21.5)	40 (20.0)	46 (23.0)
3 歳児	3 歳 7 か月～4 歳未満	68 (17.0)	25 (12.5)	43 (21.5)
	4 歳～	41 (10.3)	24 (12.0)	17 (8.5)
4 歳児				
合 計		400(100)	200 (100)	200 (100)

表 6 兄弟の数

	人数 (割合)	何番目	人数 (割合)
1 人	129 (32.3)	1 番目	176 (44.0)
2 人	182 (45.5)	2 番目	164 (41.0)
3 人	75 (18.8)	3 番目	50 (12.5)
4 人	11 (2.8)	4 番目	8 (2.0)
5 人以上	3 (0.6)	5 番目	2 (0.5)
計	400(100.0)	計	400(100.0)

70.8%が核家族であった。子どもの年齢（表 5）は、2 歳児、3 歳児で69.7%を占めている。兄弟の数は（表 6）、2 人が最も多く、ついで 1 人、3 人の順である。調査対象になった子どもは 1 番目か 2 番目の子どもが大半（85.0%）であった。

2. 母親の育児不安の特徴

調査の結果は、48点から22点までにわたって分布し（平均点34.8点）、ほぼ正規分布に近い形を示した（図 1）。得点の高い方から低い方に並べ、高い方から25%を不安度の「高い群」、低い方から25%を不安度の「低い群」とした。同得点者が複数あったので25%の人数に近い所

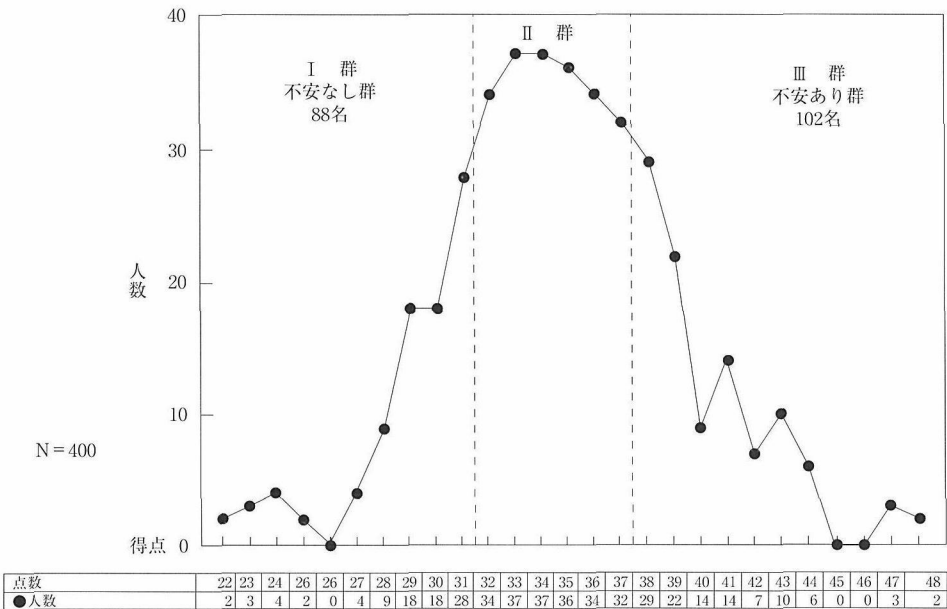


図 1 育児不安度得点分布表

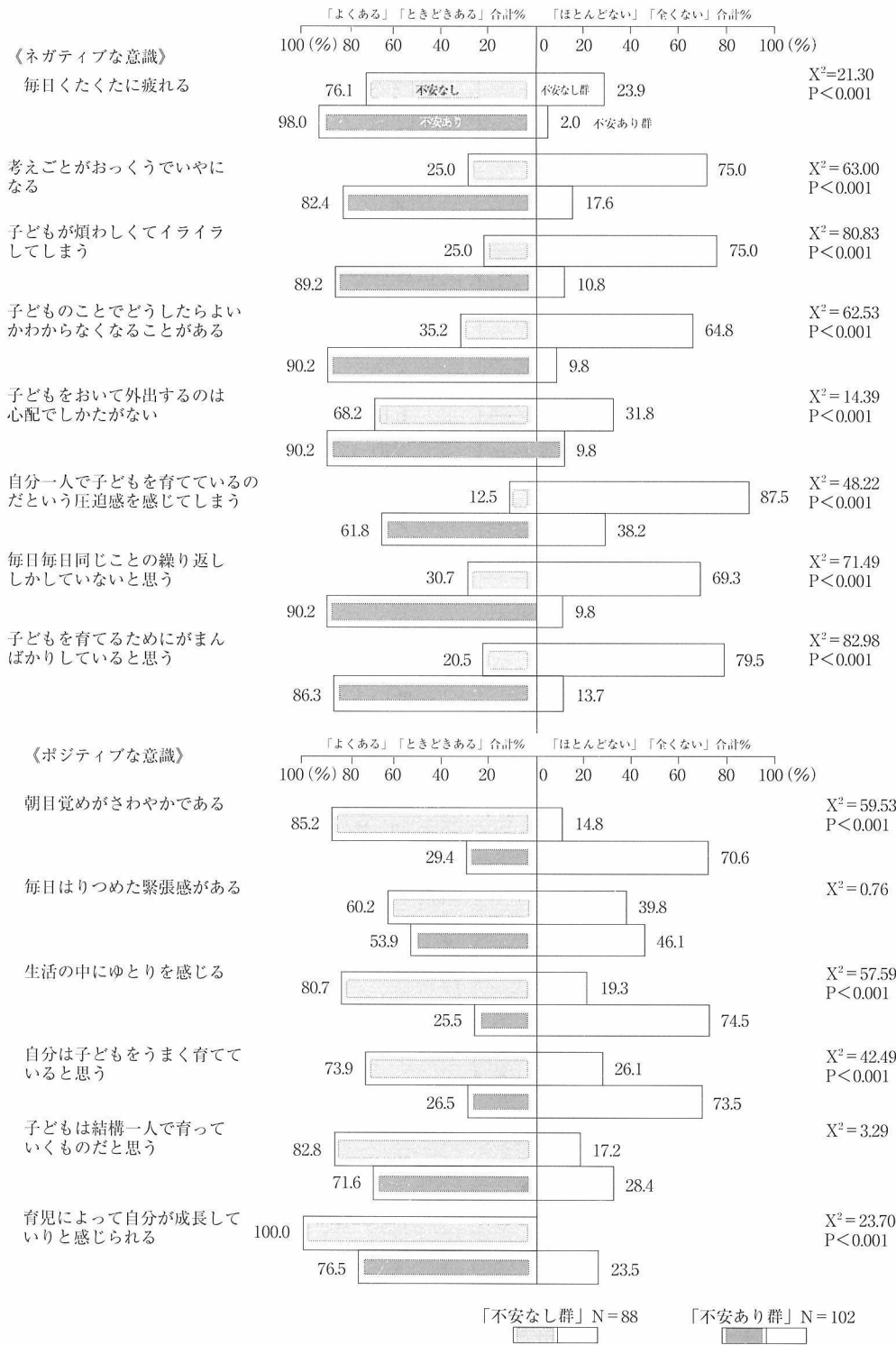


図2 「不安なし群」「不安あり群」別育児不安の特徴

で区切ったところ、不安度の高い群は38点から48点までの102名、不安度の低い群は22点から31点までの88名となった。不安度の高い群（以下「不安あり群」とよぶ）102名と不安度の低い群（以下「不安なし群」とよぶ）88名について、育児不安の特徴を図2に示した。

図2から「不安あり群」と「不安なし群」の回答パターンの違いが明らかにみられる。「毎日はりつめた緊張感がある」「子どもは結構一人で育っていくものだと思う」の2項目以外はすべての項目において有意差がみられていた（ $p<0.001$ ）。「よくある」「時々ある」に回答した人の比率の高いものから順に5位までをみると、「不安あり群」ではいずれもネガティブな意識の反応が強い。

(1) 「不安あり群」の特徴（ベスト5）

- ①毎日くたくたに疲れる（98.0%）
- ②子どものことでどうしたらよいかわからなくなることもある（90.2%）
- ③毎日毎日同じことの繰り返ししかしてないと思う（90.2%）
- ④子どもをにおいて外出するのは心配でしかたがない（90.2%）
- ⑤子どもが煩わしくてイライラしてしまう（89.2%）

これに対して、「不安なし群」の母親は、ポジティブな意識への回答率が全体に高く、ネガティブな意識に対しては「ほとんどない」「全くない」という反応が多い。回答率の高い順から5位までをみると、

(2) 「不安なし群」の特徴（ベスト5）（下線部表現修正）

- ①育児によって自分が成長していると感じられる（100%）
- ②自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じない（87.5%）
- ③朝の目覚めがさわやかである（85.2%）
- ④子どもは結構一人で育っていくものだと思う（82.8%）
- ⑤生活の中にゆとりを感じる（80.7%）

(3) 「不安あり群」と「不安なし群」で回答率の差が50%以上のをみると（回答率の差）

- ①子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う（65.8%）
- ②子どもが煩わしくイライラしてしまう（64.2%）
- ③毎日毎日同じことの繰り返ししかしてないと思う（59.5%）
- ④考えごとがおっくうでいやになる（57.4%）
- ⑤朝の目覚めがさわやかである（逆転項目）（55.8%）
- ⑥生活の中にゆとりを感じる（逆転項目）（55.2%）
- ⑦子どものことでどうしたらよいかわからなくなることもある（55.0%）

3. 育児不安と関連する要因について

〈母親自身の要因として〉①母親の年齢、②母親の職業、〈家族関係の要因として〉③子どもの年齢、④子どもの数、⑤家族形態、⑥夫の子育てに対する母親の思いとして、(イ) 夫の子育ての協力に満足しているか、(ロ) 夫は一緒に子育てをしてくれていると思うか、(ハ) 夫は子育てに責任を持っていると思うか、⑦夫とふだん話す時間について取り上げ「不安あり群」と「不安なし群」との関連をみた。

①母親の年齢（表7）

母親の年齢と育児不安との関連は、21～24歳

表7 母親の年齢と育児不安

母親の年齢	不安なし群		不安あり群	
	人数	割合	人数	割合
20歳未満	1	1.1	1	1.0
21～24歳	1	1.1	5	4.9
25～29歳	25	28.4	22	21.6
30～34歳	33	37.5	42	41.2
35～39歳	26	29.5	26	25.5
40歳以上	2	2.3	6	5.9
計	88人	100.0	102人	100.0

$$X^2=4.93$$

と30～34歳、40歳以上の母親に多少不安ありの人が多くみられるが、検定の結果は有意差がなく関連は認められなかった。

②母親の職業（表8）

母親の職業と育児不安との関連は、検定の結果は関連が認められなかった。しかし、職業を持たない専業主婦とフルタイムで働いている母親に不安あり群の比率がやや低く、パートタイムとアルバイトで働いている母親に不安あり群

表8 母親の職業と育児不安

母親の職業	不安なし群		不安あり群	
	人 数	割 合	人 数	割 合
職業を持たない	8	9.1	4	3.9
フルタイム	35	39.8	30	29.4
パートタイム	21	23.9	33	32.4
アルバイト内職	5	5.7	14	13.7
家業	16	18.2	20	19.6
その他	3	3.4	1	1.0
計	88人	100.0	102人	100.0

$$X^2=9.11$$

表9 子どもの年齢と育児不安

	不安なし群		不安あり群	
	人 数	割 合	人 数	割 合
1歳未満	3	3.4	2	2.0
1歳児	16	18.2	15	14.7
2歳	29	33.0	30	29.4
3歳	32	36.4	41	40.2
4歳	8	9.0	14	13.7
計	88人	100.0	102人	100.0

$$X^2=1.97$$

表10 子どもの数と育児不安

子どもの数	不安なし群		不安あり群	
	人 数	割 合	人 数	割 合
1人	28	31.8	31	30.4
2人	42	47.7	47	46.1
3人	13	14.8	20	19.6
4人	3	3.4	4	3.9
5人以上	2	2.3	0	0.0
計	88人	100.0	102人	100.0

$$X^2=3.05$$

の比率がやや高い傾向がみられていた。

③子どもの年齢（表9）

子どもの年齢と育児不安との関連はみられなかった。

④子どもの数・何番目の子ども（表10）

子どもの数と育児不安は、ほとんど関連がなかった。子どもの数が1人のときは勝手にわからず不安が高いと予想していたが、2人になっても3人になっても不安に思う、思わないは母親によって違うということであろう。

⑤家族形態（表11）

家族形態は、核家族（父、母、子）、核家族（母、子）、複合家族（父、母、子、祖父と祖母の両方あるいは片方）、複合家族（母、子、祖父と祖母の両方あるいは片方）でみてみた。父、母、子の核家族と父、母、子、祖父と祖母の両方あるいは片方の複合家族に多少不安あり

表11 家族形態と育児不安

家族形態	不安なし群		不安あり群	
	人 数	割 合	人 数	割 合
核家族（父母子）	55	63.2	67	66.3
核家族（母子家庭）	4	4.6	5	5.0
複合家族（父母子祖父母）	21	24.1	27	26.7
複合家族（母子祖父母）	7	8.0	2	2.0
計	88人	100.0	102人	100.0

$$X^2=3.80$$

表12 夫の子育て協力の満足度と育児不安

夫は子育ての協力のどの程度満足していますか	不安なし群		不安あり群	
	人 数	割 合	人 数	割 合
非常に満足している	24	27.3	20	19.6
まあまあ満足している	46	52.3	35	34.3
あまり満足していない	7	8.0	34	33.3
全く満足していない	3	3.4	6	5.9
不明	8	9.1	7	6.9
計	88人	100.0	102人	100.0

$$X^2=19.78$$

$$P<0.001$$

群が多い傾向がみられ、父親のいない複合家族に不安あり群が少なかったが、検定の結果は、有意差は認められなかった。

⑥夫の子育てに対する母親の思い

夫の子育てについて、実際に夫がどうであるかは別として、母親が(イ) 夫の子育ての協力で満足しているか(表12)、(ロ) 夫と一緒に子育て

表13 夫と一緒に子育てをという思いと育児不安

夫と一緒に子育てをしてくれていると思いますか	不安なし群		不安あり群	
	人 数	割 合	人 数	割 合
非常にそう思う	26	29.5	23	22.5
まあそう思う	42	47.7	42	41.2
あまりそうは思わない	9	10.2	23	22.5
全然そうは思わない	1	1.1	7	6.9
不 明	10	11.4	7	6.9
計	88人	100.0	102人	100.0

$$X^2 = 10.36 \quad P < 0.05$$

表14 夫の子育て責任と育児不安

夫は子育てに責任をもっていると思う	不安なし群		不安あり群	
	人 数	割 合	人 数	割 合
非常にそう思う	27	30.7	17	16.7
まあそう思う	33	37.5	39	38.2
あまりそうは思わない	18	20.5	28	27.5
全然そうは思わない	2	2.3	12	11.8
不 明	8	9.1	6	5.9
計	88人	100.0	102人	100.0

$$X^2 = 11.41 \quad P < 0.05$$

表15 夫とふだん話す時間と育児不安

夫とふだん1日どのくらい話しますか	不安なし群		不安あり群	
	人 数	割 合	人 数	割 合
10分くらい	3	3.4	14	13.7
30分くらい	21	23.9	25	24.5
1時間くらい	24	27.3	26	25.5
2時間くらい	11	12.5	14	13.7
3時間くらい	10	11.4	9	8.8
そ の 他	10	11.4	7	6.9
不 明	9	10.2	7	6.9
計	88人	100.0	102人	100.0

$$X^2 = 7.75$$

をしてくれていると思うか(表13)、(ハ) 夫は子育てに責任を持っていると思うか(表14)について育児不安との関連をみた。夫の子育ての協力で満足している母親 (P < 0.001)、夫は子育てと一緒にしてくれていると思う母親 (P < 0.05)、夫は子育てに責任を持ってくれていると思う母親 (P < 0.05) は不安が少なかった。母親が父親の子育てをどのように思っているかは育児不安に影響しているといえる。

⑦夫とふだん話す時間(表15)

1日のうち夫とどのくらい話をするかについては、30分から2時間程度話すという母親には差は見られないが、10分程度話をするという母親に「不安あり群」の母親が多かった。反対に3時間程度話をするという母親に「不安なし群」の母親が多かった。

4. 育児不安と排泄に関わる養育行動(表16、表17)

子どもの世話をするとき、「不安あり群」と「不安なし群」の母親ではその行動に差があるのだろうか。①おむつ交換時、排泄トレーニング時の子どもへの接し方では、子どもへの言葉かけの状況及び排泄誘導の仕方、排泄誘導から排泄終了までの接し方の工夫の有無について質問した。

「不安あり群」の母親は、おむつ交換時のことばかけが「不安なし群」の母親より少ない傾向であった (P < 0.001)。また、有意差はないが、排泄誘導から排泄終了までのことばかけも多少「不安なし群」の母親の方が子どもに多くのことばをかける傾向がみられていた。排泄の誘導の仕方では、「不安あり群」の母親は時間を決めてトイレに誘導することが多く、「不安なし群」の母親は子どものサインや訴えでトイレに誘導する傾向が多少多くみられるが、有意差はなかった。排泄誘導から排泄終了までの接し方の工夫では、全体的に「工夫している」母親は25.2%と少なく、「不安あり群」と「不安なし群」の母親の差はみられなかった。②排

表16 育児不安と排泄に関わる母親の養育行動

有意差のあったもののみ示す

母親の養育行動		不安なし 人 数 割 合		不安あり 人 数 割 合		X ² 検定
おむつを交換するとき ことばをかけますか	多くかける	52	52.1	40	39.2	X ² = 62.92 P < 0.001
	少しかける	22	25.0	1	1.0	
	ほとんどかけない	1	1.1	45	44.1	
	全くかけない	4	4.5	7	6.9	
	不 明	9	10.2	9	8.8	
	計	88	100.0	102	100.0	
便の回数を観察して いますか	毎日注意して見る	67	76.1	59	57.8	X ² = 8.76 P < 0.05
	時々注意して見る	20	22.7	36	35.3	
	殆ど注意して見ない	1	1.1	5	4.9	
	注意して見たことがない	0	0	2	2.0	
	計	88	100.0	102	100.0	
便のかたや量、混入物 を観察していますか	毎日注意して見る	59	67.0	55	53.9	X ² = 7.90 P < 0.05
	時々注意して見る	29	33.0	40	39.2	
	殆ど注意して見ない	0	0	5	4.9	
	注意して見たことがない	0	0	2	2.0	
	計	88	100.0	102	100.0	
排泄で気掛かりになっ ていることや困ってい ることがあります	ある	12	13.6	29	28.4	X ² = 5.88 P < 0.01
	ない	71	80.7	69	67.6	
	不 明	5	5.7	4	3.6	
	計	88	100.0	102	100.0	

表17 育児不安と子どもの排泄に対する感情

有意差のあったもののみ示す

子どもの排泄に対する感情		不安なし 人 数 割 合		不安あり 人 数 割 合		X ² 検定
便は汚いと思う	強く思う	0	0	3	2.9	X ² = 11.39 P < 0.01
	そう思う	12	13.6	18	17.6	
	それほど思わない	36	40.9	57	55.9	
	全く思わない	39	44.3	24	23.5	
	不 明	1	1.1	0	0	
	計	88	100.0	102	100.0	
排泄のたびのおむつ交 換やトイレ誘導は面倒 だと思う	強く思う	0	0	1	1.0	X ² = 24.81 P < 0.001
	そう思う	9	10.2	34	33.3	
	それほど思わない	47	53.4	56	54.9	
	全く思わない	31	45.2	11	10.8	
	不 明	1	1.1	0	0	
	計	88	100.0	102	100.0	

泄を失敗した時の子どもへの接し方では「不安あり群」の母親は言葉で叱る、お尻を叩き叱る、無視する、失敗には触れないが多少多く、「不安なし群」の母親はやさしく言い聞かせるが多少多い傾向がみられた。③子どもの排泄物の観察については、排便の回数、性状（量や硬さ、混入物など）、排尿の回数、性状（量や色など）について質問した。便の回数・便の硬さや色などの性状の観察に有意差が認められ、「不安なし群」の母親の方が「不安あり群」の母親より排泄物を「毎日注意してみている」傾向であった。④子どもの排泄や排泄物に対する感情 子どもの排泄に対する感情として、排泄物に対しては、「便は汚いと思う」「尿は汚いと思う」「便は臭いと思う」「尿は臭いと思う」の4項目を、排泄することに対しては、「排泄したことをうれしく思う」「子どものお尻はいつもきれいにしておきたいと思う」「自分は臭いに敏感なほうだと思う」「排泄のたびにおむつ交換やトイレ誘導するのは面倒だと思う」「便だと関わりたくないと思う」の5項目について「強く思う」「そう思う」「それほど思わない」「全く思わない」の4段階尺度で母親の気持をきいた。「不安あり群」の母親は子どもの「便を汚い」と思う人が多く（ $p<0.01$ ）、また、「排泄のたびにおむつ交換やトイレ誘導は面倒」と思っている人が多い（ $P<0.001$ ）傾向であった。他の項目には有意差が認められなかった。

⑤排泄の気掛かりについても、「不安あり群」の母親の方が「気掛かりが多い」傾向であった。気掛かりは2歳ころより多くなり、排泄が自立する4歳ころまで続いていた。気掛かりの内容は、出てから教える、トイレトレーニングが進まない、夜尿がなくならないなどの「子どもの排泄機能の発達に関する認識の不足が関連していると思われる気掛かり」が一番多く見られていた。次に、便秘など排便がスムーズにいかないといった「子どもの排泄のリズムや習慣に関連した気掛かり」が多かった。また大便をおむつにしたがる、トイレを外でし

たがるなど「子どもの排泄の習癖に関連した気掛かり」や、家庭では早くおむつを取りたいと思うが保育園では本人の自主性にまかせている、洋式に慣れているので、保育園の和式では便が出ないなど「家庭と保育園での考え方の違いや排泄環境の違いに関連した気掛かり」などがあった。

V 考察

1. 育児不安

子どもが誕生すると、母親は夜中の睡眠が分断されたり、外出の機会が減少するなど生活スタイルが変化する。また、夫婦の会話の時間が減少したり、話題が子ども中心になるなど夫婦の関係やさらに家族メンバーすべての関係も変化する¹⁷⁾。子育てというのは、目の前の子どもから目を離すことができず、自分のペースで動くこともままならず、常に子ども中心にならざるをえない営みである。従って、子育てには何らかの不安、心配、懸念、苛立ちが伴うものである。大部分の母親たちは、育児への不安や戸惑いを感じながらも何らかの方法で解決しているのではないと思われる。

しかし、不安や戸惑いが解決できないまま鬱積してしまうとネガティブな感情を抱きやすくなることが考えられる。「不安あり群」の母親は、子どもを育てるために自分のしたいことを我慢しなければならないという思いが強く、子育てをしていてイライラすることが多く、子育てに疲れを感じ、生活にゆとりを感じていない状況である。反対に「不安なし群」の母親は、ネガティブな感情よりポジティブな感情の方が強く、子育てをしていることで自分の成長を感じ子育てを楽しむゆとりを持っていることがうかがえる。この調査結果は、牧野の調査⁹⁾と同様の傾向を示している。

このような「不安あり群」と「不安なし群」の母親の意識はどこからくるのであろうか。今回の調査の結果でも、牧野の調査と同様に母親

の父親に対する意識が関連しており、「夫の子育てに満足している」「夫は一緒に子育てをしてくれていると思う」「夫は子育てに責任を持ってくれていると思う」など、父親に対する母親の意識がポイントになっているといえる。父親に対する母親のこのような意識は、母親の気持ちを安定させ、子育てへのポジティブな感情を増し、積極的な気持ちで子育てができることにつながっていると考えられる。母親の父親に対する意識は夫婦関係の問題でもあるが、父親に育児参加を多くしてもらうことも有効であると考えられる。

母親の背景と育児不安との関連では祖父母同居の複合家族は、子育ての相談や協力が得られやすいため不安が少ないのではないかと予想していたが、結果は不安がやや多い傾向であった祖父母の同居は育児への協力が得られる反面、育児方針の違いや子どもを甘やかすなどのマイナス面もあり¹⁸⁾、母親にとっては不安につながっているのではないかと考えられる。現代社会の中でこれからの子育てを考えた場合、育児不安は減少するどころか益々増加するのではないかと危惧するのである。その理由を考えてみよう。現代社会の少子化や核家族化、地域社会とのつながりの弱体化¹⁹⁾は、自分より小さい子どもに触れる体験を全くしないまま親になる母親や、母親の周囲に子育てモデルがなく教えてもらえる人も少ない状況である。また、就業している女性、特に有配偶女性の就業が増えている²⁰⁾ことや、女性の自己実現の道が多様化してきた²¹⁾ことは、女性は母親や主婦としてだけではない新しい生きがいを求めたいという気持ちを強めている。従って、子育ては女性の人生の全てではなく、数多くある自己実現の一つにすぎなくなっている。さらに、情報化社会による育児情報の氾濫である²²⁾。少子化が進んでいる一方で、育児雑誌の販売が伸びている現状があり²³⁾、これは子育ての知識を雑誌に頼っている親が多いことを物語っている。しかし、雑誌には一般的標準的な内容の記載が多く、実際に

親が知りたいと思っていることがそのまま載っているわけではない。親によっては、雑誌に載っている子どもの状態が正常な子どもと思い込み、少し違うわが子は異常ではないかと思ってしまうのである。何冊もの雑誌が手元にあっても雑誌の育児情報をうまく活用できず²⁴⁾不安をつのらせる結果になる。

以上のように、現代社会では育児不安を増強させる要因が多い。従って、子育てをしている母親の育児に関する不安、心配、悩みには今以上に注目していくことが必要であると考えられる。

2. 育児不安の養育行動への影響

「不安あり群」の母親と「不安なし群」の母親の子どもの排泄に関わる世話行動を比較してみると、「不安あり群」の母親は、子どもの「便は汚い」「排泄のたびのおむつ交換やトイレ誘導は面倒」という気持ちが強く、排泄の世話行動では、「排泄の世話をするときの子どもへの言葉かけが少なく」、「排泄の回数や性状を注意して観察していない」傾向がみられた。

「不安あり群」の母親は、ネガティブな意識への反応が強いが、これは子育てに対する母親自身の心性の現れであるといえる。ネガティブな意識が強すぎると子どもを拒否したくなったり、育児を煩わしく避けたいという気持ちを持つのであろう。

ここで子どもにとっての排泄の意味を考えてみよう。最初、子どもは不快な排泄物が付着したおむつを取り替えてくれたのが母親だとは気付いていない。子どもは排泄することによって排泄に伴う快と排泄物が取り除かれる快を体験すると同時に母親によってやさしく体に触れられ、眼差しを合わせ、話し掛けられるというなんとも心地よい満足感を体験する。排泄以外の授乳、入浴、着替えなどの世話を受けることによって、次第に自分の欲求とその欲求を充足してくれる母親に気付いていくのである。さらに、排泄をすれば母親は喜び、排泄がないと母親は心配するという母親の姿を繰り返し眺めて

いるうちに、自分の排泄は母親にとって大切なものであるらしいと思うのである。やがて自分の排泄物を母親にあげると母親に喜んでもらえる、そして母親の姿をみて自分も嬉しくなるという体験をする。この体験のなかで二人の心が通じ合い、子どもは母親から愛され大切に思われていることを肌で感じるのである。この積み重ねが母親への信頼を確固なものにしていく。

2歳前後から排泄の予告が可能になるが排泄を十分に抑制することは困難で、パンツに漏らしてしまうことも多い。失敗したときには、叱るのではなく、うまくいったときにほめてあげ、排泄をコントロールできた喜びと排泄の開放感を母親と共有する体験が大切である。ドルト²⁵⁾は、子どもが失敗してつらい思いをしても、母親がやさしく慰め、気持ちが鎮まるようにふるまってくれるとき、その失敗は子どもにとって受け入れられるものとなり、そこから学ぶことができる豊かな経験に転化するという。こうした積み重ねが、子どもの心に母親と同じようにトイレで排泄しようという意欲を育むことになるのである。つまり、排泄という行動は、食べたものを消化し、捨て去るという生理的プロセスを、母親が教える場所と方法で行なうという社会性を獲得することであるが、このためには母親から愛情を受けることによって形成されるアタッチメントを基盤にした心理的発達が平行していることが必須であるといえる。従って、排泄訓練がどのように行なわれたかは性格形成上、大きな意味を持つ²⁶⁾ことにもなるのである。

以上のように子どもにとっての排泄の意味を考えると、排泄の世話時の子どもへの言葉かけが少なかったり、排泄物が汚い、おむつ交換やトイレに連れていくのが面倒という母親の気持は、子どもに何らかの影響を与えていると考える。

乳幼児期の子どもの育てていると、育て方についていろいろな心配や悩みを感じるのはごく自然なことである。しかし、心配や不安の程度

が強すぎる場合や蓄積された状態は、子どもにとっても母親にとっても望ましいことではない。育児をしている母親の不安の軽減に努めると同時に、母親の子どもへの接し方についての情報を得てきめ細かな相談・指導が重要であると考ええる。

まとめ

- 1) 「不安あり群」の母親はネガティブな意識の反応が強く、「不安なし群」の母親はポジティブな意識の反応が強かった。
- 2) 「不安あり群」の母親は「不安なし群」の母親より、「子どもを育てるためにがまんばかりしている」「子どもが煩わしくイライラしてしまう」「毎日毎日同じ事の繰り返ししかしていないと思う」「考え事がおっくうでいやになる」「子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある」という意識が強く、「朝の目覚めがさわやかである」「生活の中にゆとりを感じる」ことが少なかった。
- 3) 育児不安の程度は、母親の年齢や職業、子どもの年齢や数、家族構成などとは関連がみられなかった。
- 4) 育児不安の程度に関連する要因は、夫の育児に対する母親の意識が大きく関連していた。
- 5) 「不安あり群」の母親は「不安なし群」の母親より、子どもの排泄の世話をするときの「言葉かけが少なく」、「排泄（便）の回数や排泄物（便）の観察を注意して見ていない」傾向であった。また、子どもの「便を汚い」という思いが強く、「排泄のたびにおむつ交換することやトイレに誘導することを面倒」と思っていた。
- 6) 育児不安は養育行動に影響していることから、育児不安への援助は重要であり、母親の子どもへの接し方に注目した援助を考えることが必要である。

〔謝辞〕

本研究の調査にあたり、ご多忙にもかかわらず快くご協力いただきました保育園の園長先生はじめ保母諸姉の皆様、お母さま方に心よりお礼申し上げます。

〔引用・参考文献〕

- 1) 村松次郎：家族における社会化としつけ，現代エスプリ，113，5-22，至文堂，1996.
- 2) 大日向雅美：親としての発達，日本児童研究編，児童心理学の進歩，153-179，金子書房，1991.
- 3) シンポジウム資料：虐待からの子どもの救出とケア．児童相談所における児童虐待相談の推移，1996.
- 4) 田村雅子：小児虐待の時代推移，小児保健学会講演集，42，250-252，1995.
- 5) 佐々木保行・高野陽・大日向雅美・神馬由貴子・芹沢茂登子：育児ノイローゼ，有斐閣，1982.
- 6) 大日向雅美：母性意識の発達に関する研究(1)―3つの世代間の差異について―，日心41回大会，694-695，1977.
- 7) 大日向雅美：母性をめぐる現状と問題点，保育研究所編，保育情報，94，2-11，1985
- 8) 大日向雅美・高橋種昭・小宮山要・高野陽・新道幸恵：母親の育児不安とその背景要因について，教心31回総会，28-29，1988.
- 9) 牧野カツコ：乳幼児をもつ母親の生生活と〈育児不安〉，家庭教育研究所紀要，3，34-56，1982.
- 10) 中津郁子・高梨一彦・佐々木保行：幼稚園生活における幼児の不安感情に関する研究―第2報 母親の育児不安との関係について―，小児保健研究，55(4)，530-536，1996.
- 11) 川井尚・庄司順一・千賀悠子・他：育児不安に関する臨床的研究Ⅱ―育児不安の本態としての育児困難感―，日本総合愛育研究所紀要，32，29-47，1996.
- 12) 恒次欽也・川井尚・庄司順一：育児不安に関する基礎研究(1)―児の年齢要因についての検討―，小児保健学会講演集，43，76-77，1996.
- 13) 梅田幸恵・柳谷真千子・巷野悟郎：小児保健クリニック新規来所者の特徴―育児不安の軽減に向けて―，小児保健学会講演集，40，774-775，1994.
- 14) 石垣和子・杉下知子・平山宗宏：手紙による母親の育児相談からみた地域母子保健活動の一考察，小児保健学会講演集，40，756-757，1994.
- 15) 猪野郁子：母親の育児の悩みと育児感情との関係―松江市在住の幼児を持つ両親の調査から―，小児保健研究，54(4)，473-477，1995.
- 16) 牧野カツコ・中西雪夫：乳幼児をもつ母親の育児不安，家庭教育研究所紀要，6，11-24，1982.
- 17) 氏家達夫：乳幼児と親の発達．生涯発達心理学2 人生への旅立ち，1995.
- 18) 飯島久美子・松園典子・大日向雅美・沢田啓司：母親に対する育児に関するアンケート調査から―母親の就労、夫の協力、祖父母との同居との関わりと母親の意識―，小児保健研究，50(1)，16-19，1991.
- 19) 日本の子どもを守る会編：子どもと家族をめぐるこの1年，しつけ、揺れ動く家族，子ども白書，草土文化，1996.
- 20) 日本の子どもを守る会編：共働きと子ども，子ども白書，草土文化，1994.
- 21) 深谷和子・三枝恵子：親になること，家庭科教育，69(3)，31-38，1995.
- 22) 加藤満子・他：育児情報のクオリティ・アシュアランス，日本小児保健学会講演集，42，236-237，1995.
- 23) 小林亜子：育児雑誌の四世紀半，現代エスプリ，342，123-136，1996.
- 24) 山岡ティ・他：母親たちの育児情報の受けとめ方に関する研究(1)―総論及びマスコミの育児情報―，日本小児保健学会講演集，41，118-119，1994.
- 25) Dolt, F. 著・榎本譲訳：無意識的身体―子どもの心の発達と病理―1，2．言叢社，1994
- 26) 小倉清：排泄、社会性のはじまり，こどものこころ，：慶応義塾大学出版会，78-84，1996.